

〔翻 訳〕

西洋の思想史におけるゲ-テの位置づけ (その三)

ルドルフ・シュタイナー
溝 井 高 志 (訳)

世界現象の変態

自然を動かす二つの大きな歯車とも言うべき**分極性 (Polarität)** と**上昇 (Steigerung)** という概念の意義がゲ-テの脳裏に浮かびあがった時に、彼の世界観は最高の成熟段階に達した(『論説<自然>の解説』の論文 参照。キュルシュナー版、34 巻、63 頁及び次頁)。我々が自然の現象を質量的な側面から (materiell) 考える限り、分極性は自然現象に固有のものである。それはあらゆる質量的なものが二つのものの対立した状態で現われるところに見られるが、それはちょうど磁石が北極と南極において見られるのと同じ状態である。質量のこのような状態は、あらわな姿で目の前にあるか、或いは質量的なものの中にまどろんでいて、適切な手段が講じられることによって質量的なものの中にそれが呼び覚まされるかのいずれかである。我々が自然現象を精神の側面から (geistig) 思考する限り、上昇ということが現象には固有のものとなる。それは発展していくものと考えられる様々の自然の領域で生起する事象において見られうる。これらの事象はこのような発展の諸段階においてそれらの根底にある理念を多かれ少なかれ外的な現象においてははっきりと提示して見せる。植物の法則としての理念は、果実において、ただ不明瞭にはあるが、現象の中に刻印されている。精神が認識する理念と、感覚によって知覚されたものとは互いに似てはいない。「花において植物の法則は最高の現象

となって現われる。そしてバラの花はこの現象の頂点を示す。』¹⁾ 創造的な自然によって物質的なものの中から精神的なものが明確な形をとって現われてくる過程こそゲ-テが上昇と呼んでいるものである。自然は絶えず努めて上昇するものの中で把握される。即ち、自然は上昇する秩序の中で、事物の理念を外的な現象の中によいよ明らかに示すような物象を作り出すことを求める。「いかなるところでも注意深い観察者の目にあからさまに示されてくることのないような秘密は自然の中には存在しない」²⁾ という見解をゲ-テはもっていた。自然は、互いに親近性をもつ事象が展開する大きな領域に関しての理念が直接そこから読み取られるような現象を生み出すことができる。上昇がその目的に達し、理念が直接的に知覚されるようになるのは、現象においてである。自然の創造的な精神がこの事物の表面に現われる。そしてこの精神は、粗野な一物質的な現象の領域でただ思惟によってのみ把握され、精神的な目によってのみ直観される。そしてそれは上昇を極めた現象の中で、肉体の目にも見られるものとなる。あらゆる感性的なものがここではまた精神的であり、あらゆる精神的なものが感性的である。ゲ-テは全自然の中に精神が浸透していると考えていた。その形式が様々であるのは、精神がそれらの中に多かれ少なかれ外的にもまた見られることによる。死せる、精神を欠いた物質なるものをゲ-テは知らない。自然の精神が自らの理念的な本質に似ても似つかない外的な形式を自らとる場としての事物がそのような物質として現

われる。精神が自然の中で、そして人間の内面の中で活動するからこそ、人間は自然の生産に参与しうるまでに自らを高めることができる。

「……屋根から落ちてくる煉瓦から、あなたの中に覚醒し、あなたが伝える照明する働きとしての精神の眼差しに至るまで」³⁾ ゲーテにとっては万有の中の一切が活動として、一つの創造的な精神の現われとして認められる。「我々が経験の中に認めるあらゆる活動は、それがいかなる類いのものであれ、最も恒常的な方法で互いに関連し合い、錯綜し、絡まり合っている。それらは初めから終りまで波動的に伝わっていく(undulieren)。」⁴⁾「煉瓦が屋根から落ちる。それを我々はごく一般的な意味で偶然であるという。それはおそらくは機械的に(mechanisch)通りすがりの人の肩に当たる。しかしそれは完全に機械的だというわけではない。それは重量の法則に従っている。つまりそれは物理的に(physisch)活動している。生命の器となるものは、一旦それがばらばらに引き裂かれるや、ただちにその機能を停止する。その瞬間、体液は化学的に(chemisch)作用し、元素的な特性が表面に現れる。しかし損なわれた有機的な(organisch)生命は同様に素早くそれに対抗して、元に復しようとする。しかし、人間としての全体は多かれ少なかれ無意識的に、そして精神的に(psychisch)損なわれ、そのことをあらためて認知する人間は倫理的に(ethisch)最も深く傷ついたと感じる。それがいかなる類いのものであれ、自らの活動が疎外されることで、人は嘆き悲しむが、しかしそれを人は渋々我慢せざるをえない。それに対して宗教的には(religiös)、このことがより高い摂理に帰せられ、それによって人はより大きな災いから守られ、それによってまたより高い善へと導かれるのだとみなすことが彼には容易となる。悩める者にはこれで十分である。しかしその傷から癒えた者は天才的に(genial)自らを高め、神をそして自分自身を信じ、己れが救われたと感じ、おそらくはまた偶然の機会をとらえ、永遠に清新な生の圏内に生きることを始めるために、自分

にとって有利なものへと向かう。」ゲーテにとっては一切の世界の活動が精神の変態(Modifikationen)として現われる。それらの活動に深く沈潜し、それらを偶然的なものの段階から天才的なものの段階に至るまで通して観察する者は、精神とは似ても似つかぬ外的な現象の中に精神が姿を現わす形態から、精神がその最も己れに相応しい形式をとって現われるような形態に至るまで、限なく精神のメタモルフォーゼ(変態)を体験し尽くす。ゲーテ的な世界観の意味で、あらゆる創造的な力は統一的に活動する。互いに親近性をもつ多様なものが段階的に発展していく過程であらわとなるひとつの全体的なものがそれである。ゲーテはしかし決して世界の統一を一つの形式のものとして(als *einformig*)表象しようとする傾向をもたなかった。統一の思想(Einheitsgedanke)を信奉する者はしばしば、一つの現象領域で観察される合法則性を自然全体に敷衍して考えるという過ちに陥りがちである。例えば機械論的な世界観(die mechanistische Weltanschauung)がこの例に当てはまる。このような世界観は機械的に説明される事柄に対する特別なものの見方と理解をもっている。そのためにこのような世界観をもつ者の目には機械的なものが唯一自然に適ったものとして現われる。このような世界観をもつ者は有機的な自然現象をもまた機械的な合法則性へと還元しようとする。このような世界観をもつ者から見れば、生き生きとして活動するものは、機械的な事象が共同して活動する複雑にこみいった形式以外の何物でもない。シュトラースブルクで入手したホルバッハの『自然の体系』の中に、ゲーテはこのような世界観が、特に反発を感じさせるような形式で表現されているのを見た。「ある物質は永遠なものであり、その物質は永遠性によって動かされ、その運動によってそれは右へ左へ、そしてあらゆる方向に向かって造作無く現存在の無限の現象を生み出すのだと彼は言う。しかも著者が我々の目の前でその活発な物質(Materie)から世界を実際に築き上げて見せたとしたら、

我々はこれらすべてのことに納得したことであろう。しかし彼は我々以上に自然についてよく知っているわけではない。というも、彼は一般的な概念のいくつかを代としてたてながら、たちまちそれを見捨て、自然より高次のもの、自然の中でより高次の自然として現われるものを、物質的な、重い、成程活発ではあるが、しかし方向性も形態ももたないような自然に敢えて変えてしまっているのである。そしてそれによって彼は実に大したことを為しえたと信じているのである」⁵⁾(詩と真実、第二巻)。もしゲーテがデュ・ボア・レイモンの次のような文章(『自然認識の限界』13頁)に耳を傾ける機会があったとしたら、彼は同じように発言したことであろう。デュ・ボア・レイモンは言っている。「自然認識とは……物体世界の変化を、アトム、その時間に依存することのない中心的な力によって引き起こされる運動へと還元していくことであり、自然の出来事をアトムの力学へと解消していくことである」⁶⁾と。ゲーテは自然のさまざまな作用が互いに親近性をもちつつ、互いに内的に絡まり重なり合っているものと考えていた。しかし彼はそれを唯一の方法に還元しようとは決してしなかった。彼はあらゆる自然現象が還元されていくような抽象的な原理(ein abstraktes Prinzip)のようなものではなくて、創造的な自然がその現象するすべての領域で一般的な法則性をもつ特別な形式を通して明らかになるような、特徴的な方法による観察(Beobachtung der charakteristischen Art)をなんとかして自分のものにしようと努めた。彼は全ての自然現象に一つの思考形式をむりやり押しつけるようなことを望まず、様々の思考形式に習熟することによって、自然がそれ自身まさにそうであるように、自分の精神が、生き生きと、しなやかに保たれることを欲したのである。あらゆる自然の働きの偉大な統一についての感情が彼の中で力強いものとなる時、彼は汎神論者であった。「私自身は私の多様な方向へと向かう本性のために一つの思考方法で満足することはできない。つまり、詩人と

芸術家としての私は多神論者であり、それに対して自然研究者としての私は汎神論者であり、それぞれがはっきりしている。私が道徳的な人間として、私の人格のために一なる神を必要とするなら、それはそれでなんとかなったのです」(ヤコービ宛て書簡、1813年1月6日)。芸術家として、ゲーテは理念が直接的な直観となって目の前に現れるような自然現象へと向かった。個々のものがここでは直接、神的なものとして現われ、世界は神的な個性をもつ多様なものとして現われた。自然研究者としてのゲーテはまた、理念が個別的な現存在の中に見られることのないような現象の中に自然の力を追及せざるをえなかった。詩人として、彼は神的なもの多様さに満足することができた。自然研究者としては、彼は統一的に作用する自然の理念を追いかめないわけにはいかなかった。「最高の統一性の中で現象する法則は、その最も固有な条件に則って客観的に一美しいもの(das Objektiv-Schöne)を生み出す。そしてそれは当然自分が把握されるのにふさわしい主観を見出すに違いない。」⁷⁾個々の被造物の中のこの客観的に一美しいものをゲーテは芸術家として直観しようとする。しかし自然研究者としての彼は「一般的な自然が自らの行動の規範とする法則を知る」⁸⁾ことを欲する。多神論とは個々のものの中に精神的なものを認め、それを崇める思考方法であり、汎神論とは全体としての精神を把握する思考方法である。二つの思考方法は互いに矛盾なく共存し、自然の全体への目の向けられ方次第で、それぞれが自分の考え方の正しさを主張する。生命とその継続的な流れは一つを中心点から出てくるか、或いは個々のものへと向かうかのいずれかであるが、その個々のものの中で、自然は、それが通常はある一つの全体としての領域を越えて広げていくものを、一つの形式にまとめる。例えば創造的な自然の力が「無数の植物」⁹⁾に做って、あらゆる他の植物がそこに含まれるような一つの植物を作り出したり、或いは無数の動物に做ってあらゆる動物をうちに含むような一つの存在、即ち人間を生み

出したりするような場合に、このような形式が成立する。

*

ゲーテはかつて次のようにコメントしている。「それらのもの（私の著わしたもの）と私の人となりをもっとも理解しえた者は、自らがある種の内的な自由を獲得したということをも認めざるをえないであろう」¹⁰⁾（宰相フォン・ミュラーとの対話、1831年1月5日）。この言葉によって彼はあらゆる人間の認識努力の中に認められる活動する力を示唆している。人間が自分の身のまわりの対象を知覚し、人間がそれらの法則を、それらの対象の中に植え付けられ、それらの対象を支配する原理として見ることに留まっている限り、それらの対象は、彼に働きかけ、自らの法則の中味を彼に押しつけるよそよそしい力として、彼に対立しているという感情を、彼はもたざるをえない。彼は事物に対峙して自由でないと感じ、彼は自然の合法則性を自らがどうしても従わざるをえない硬直した必然性として感じる。自然の力とは、人間自身の中に活動しているのと同じ精神の形式以外の何物でもない、ということに人間が気づく時に初めて、自らが自由に参与しているのだという理解が人間の中に芽生える。自然の法則性は、それがよそよそしい力として見なされる限りにおいてのみ、強制として感じられる。自然の本質の中に入り込んで生きる場合には、人は自らの内面においてもまた活動する力として自然を感じ取り、また事物の生成と本質の中で共に生産的に活動する要素として (als produktiv mitwirkendes Element beim Werden und Wesen der Dinge) 自分自身を感じる。人は汝 (Du) であり、あらゆる生成の力を備えた汝 (Du mit aller Werdekraft) である。人は通常は単に外的な刺激として感じるものを自らの行為の中に受け入れてきた。これはゲーテ的な世界観の意味で、認識行為が引き起こす解放の過程 (Befreiungs-Prozeß) である。ゲーテがイタリアの芸術作品に触れることによって、自然の活動のアイデアがその眼差しを彼に向

けた時、ゲーテはこれらのアイデアを明らかに直観した。これらのアイデアが人間の心の中に占めることによって人間の内面に引き起こされる解放的な作用 (die befreiende Wirkung) から、彼は一つのはっきりとした感情をもつにいたった。こういった感情から生み出されてきたものが、彼が**包括的な精神** (die *umfassenden* Geister) の叙述と呼んでいる認識方法の叙述である。「より誇らしい意味で我々が創造者 (die Erschaffenden) と呼ぶこともできる包括者 (die Umfassenden) は最高度に生産的に振る舞う。つまりそれらはアイデアから発することによって、全体的なものの統一を既に言い表わしている。そしてある程度まではそれ以後この**アイデアに従うことが自然の成り行きである。**」¹¹⁾しかしゲーテはこの解放の行為 (der Befreiungs-akt) の直接的な直観にまでその叙述をもっていくことをしなかった。自らの認識において自分自身に耳を傾ける者だけが、この直観をもつことができる。ゲーテはなるほど最高の認識方法を実践した。しかし彼はこの認識方法をそれ自身として観察することはしなかった。彼は次のように告白している。

お前は如何に多くのことをやり遂げてきたことか？

御身は言う、お前は立派にそれを成し遂げてきたと！

確かに私は賢明にそれを為した。

しかし私は決して思惟についてだけは考えることをしなかった。¹²⁾

しかし創造的な自然の力が無数の植物に做ってあらゆる他の植物がそこに包含される一つの植物を更に作り出すように、そのように自然の力はまた無数のアイデアに做ってすべてのアイデアの世界がそこに包含されてあるような一つのアイデアを更に産み出す。そして人間が他の事物と事象の直観に思惟の直観を結びつける時に、このアイデアを人間は把握する。まさにゲーテの思惟は絶えず直観の対象に満たされてあったが

故に、そして彼の思惟は一つの直観であり、彼の直観は一つの思惟であったが故に、彼は思惟そのものを思惟の対象とすることができなかった。しかし思惟の直観 (die Anschauung des Denkens) を通してのみ人は自由のアイデアを獲得する。思惟についての思惟 (Denken über das Denken) と思惟の直観 (Anschauung des Denkens) の区別をゲ-テはしなかった。もし区別していたとしたら、まさに彼の世界観にふさわしい意味で、思惟について思惟すること (über das Denken zu denken) を人はおそらく拒否しうが、それでもなお思想世界の直観には (zu einer Anschauung der Gedankenwelt) 到達しうのだという理解を彼はもつに至ったであろう。他のあらゆる直観の成立には人間は関与しない。人間の中にはこれらの直観の諸々のアイデアがよみがえる。とはいえこれらのアイデアを現象へともたらす生産的な力 (die produktive Kraft) が人間の中にないとしたら、これらのアイデアは存在しないことであろう。たとえアイデアとは事物の中に活動するものの内容ではあるにしても、これらのアイデアは人間の活動を通して現象する存在となる。それ故に、人間は自らの活動を直観する場合にのみ、アイデア世界の本質を認識することができる。あらゆる他の直観に際してはただ人間は活動するアイデア (die wirkende Idee) の中に浸透していくのみである。活動の場としての事物は人間の精神の外部で知覚されるものであるにとどまる。アイデアの直観においては、働くものと働きかけられるもの (Wirkendes und Bewirktes) が彼の内面の中に完全に含まれている。彼はその全過程を完全に彼の内面の中で現在のものとして体験することができる。直観はもはやアイデアから発するものとは思われない。というのも直観とはそれ自体がアイデアであるからである。自らを産みだすものの直観とはしかし自由の直観である。思惟を観察するに際して、人間は世界で生起する事象を見通す。彼はここではこの生起する事象そのもののアイデアを探究する必要がない。というのもこの生起する事象こそ

がアイデアそのものであるからである。それ以外に体験される直観とアイデアの統一とは、ここではアイデア世界の直観化された精神的なるものの体験である。この自己自身の内部の活動を直観する人間は自由を感じ得る。ゲ-テはこの知覚をなるほど体験はしていた。しかしそれを最高の形式において言い表わすことをしなかった。彼は自ら自然を考察する際に自由な活動を為した。しかしその活動が彼によって対象的に (gegenständlich) 把握されるということとはなかった。彼は人間の認識の背後を覗き込むことをしなかった。それ故に、彼は世界で生起する事象についてのアイデアをその最も本来的な姿で、その最高のメタモルフォーゼ (変態) において意識化して受けとめることをしなかった。人間がこのメタモルフォーゼ (変態) の直観に到達するやいなや、人間は事物の領域の中を確実に運動する。彼は自らの人格の中心点において、あらゆる世界考察のための真の出発点を獲得する。彼はもはや知られることのない根拠、自らの外にあるものの原因を探究することをしない。彼の与かることのできる最高の体験が、自らの本質的なものの自己考察の中にあることを彼は知る。この体験が呼び起こす感情に完全に浸された者は事物との最も真実な関係を獲得する。このことがあてはまらない者はどこか他のところに現存在の最高の形式を求め、彼はそれを経験の中に見出すことができないために、彼は現実の見知らぬ領域の中にそれを推量する。このように事物を考察することによって人は何か不確かなものを獲得する。自然が彼に投げかける問いに答える際に、このような人間は絶えず不確かなものに自らの根拠を置くことになる。ゲ-テはアイデア世界を生きることによって人格の内部の確かな中心点から、一つの感情 (ein Gefühl) を得ていたが故に、自然を考察するに際し、一定の限界内で、一層確実な概念に到達することができたのである。しかし最も内的な体験の直接的な直観が彼には欠けていたために、彼はこの限界の外では不確かにあちらこちらと手探りしつつ迷う。この理由から、

人間は世界の問題を解くために生れてきているのではなく、おそらくはその問題がどこから出てくるかを探り、しかも把握されるものの限界内にとどまる運命を負って生れてきているのであると彼は言っている。彼は言う、「カントは人間の精神にどの程度まで前に突き進んでいく能力があるのか、限界を引いてみせ、解かれることのない問題はそのままにしておくことによって、彼は確かに最高に有益なことを為したのである」¹³⁾と。最高の体験の直観が物事を考察するにあたってゲ-テに確実性を付与したとすれば、「規則に則った経験によって、限定されてはいるが一種の確実性に到達する」¹⁴⁾方法より以上のことを彼は自分なりのやり方でやりとげることができた筈である。経験の中に真直ぐに分け入り、突き進んでいく代わりに、真なるものはそれが人間の本性によって要求されている限りにおいてのみ、一つの意義を有するのだという意識をもって、彼は、「より高次の影響力が、毅然とした、活動的な、分別ある、几帳面な、きちんとした、人間的な、敬虔なる者に」¹⁵⁾有利に作用するのだという確信に、そして道徳的な世界秩序は、善良な者に、実直ではあるが、悩める者に直接助けとなるとところで、最高に素晴らしく呈示されるのだという確信に到達している。

*

ゲ-テは、最も内的な人間的な体験をすることができなかつたために、彼が自然を直観するために不可欠であった人倫的な世界秩序についての究極的な思想に到達することができなかった。事物のアイデアとは事物の中で活動的に働く、創造するものの内容である。人倫的なアイデアを人間は直接アイデアの形式で体験する。アイデア世界を直観するに際して、理念的なものがどのようにして己れ自身を自らの内容とし、どのようにして自らが己れ自身で満たされるかを体験できる者はまた、人倫的なものを人間の本性の内部で生み出すことを体験する。自然のアイデアをただその直観世界に関係づけて知ることができる者はまた人倫的なものの諸概念を、それ

らの外部にあるものに関連づけようとする。経験から得られた概念に対応してそれに似た現実があるように、これらの概念に対応している似た現実を彼は探し求めるであろう。しかしアイデアをそれらの最も本来的な、本質的な姿で直観できる者は、人倫的な概念に関して、いかなる外的なものもそれらに対応することはないということに、そしてそれらは直接精神の体験を通してアイデアとして生み出されてくるものだということに気づく。ただ単に外的に働く神的な意志も、このような人倫的な世界秩序も、これらのアイデアを生み出すほどに活動的ではないことは彼には明らかである。というのも、それらの中にはこのような力と関連をもつようなものは何一つ認められないからである。それらが言い表わす一切のものは、精神的に体験された純粋なアイデアの形式の中にも込められているものである。ただそれらに固有の内容を通してのみ、それらは人間に人倫的な力として作用する。いかなる定言的命法も人間の背後から、むりやりそれらの命令に従うように人間に強いるのではない。人間はそれらを自ら生み出し、わが子を愛するようにそれらを愛していると感じる。愛が行為の動機である。自らの生産的な行為に伴う精神的な喜びが人倫的なものの起源である。

いかなる人倫的なアイデアも自分の中から生み出すことができないような人達がいる。彼等は他の人間の作り出した理念を伝承として受け取る。そして彼等がアイデアそのもののための直観能力をもたない場合には、精神の中で体験できる人倫的なものの起源を彼等は認識することがない。彼等は超人間的な、彼等の外なる意志の中にそれを求める。或いは人間的に体験される精神世界の外部に客観的な人倫的な世界秩序なるものがあって、そこに道徳的な理念が由来すると彼等は考える。人間の良心の中にしばしばこの世界秩序を言葉として言い表わす器官が求められる。ゲ-テの他の世界直観のある種のものについてと同様に、人倫的なものの起源についてのゲ-テの思想においてもまた、彼には確信が欠けている。ここでもまた、アイデアに適

ったものに対する彼の感情が、彼の本性の要求にふさわしい命題、即ち「人が自分自身に命じるものを愛することは義務である」¹⁶⁾といった命題を生み出す。人倫的なものの根拠を純粋に人倫的なアイデアの内容の中に見ることのできる者のみが次のように言う。「様々の制限を苦々しく思っていたレッシングは作中人物の一人に、誰であれ、しなければならないからするというようなことがあってはならない (*Niemand muß müssen.*)」と言わしめている。作中のある機知に富んだ、快活な人物は言っている、欲する者はそれをするに違いない (*Wer will, der muß*) と。第三の、もちろん教養ある人物が更に付け加えて言う、理解する者はまたそれをするを欲する (*Wer einsieht, der will auch*) と。このようにして認識、欲求、当為の全範囲が総括された人は信じる。しかし概して人間の認識は、どのような種類のものであれ、彼の行為と態度を規定する。だからこそ、無知なままで行為するのを見ることほど恐ろしいことはない。¹⁷⁾たとえ明らかな直観にまで達することはなかったにせよ、人倫的なものの真の本性に対しての感情がゲ-テの中に支配していたことは、次のような彼の発言から明らかである。意志は「それが完全なものとなるためには、人倫的なものにおいて迷うことのない良心に・・・従わなければならない。・・・良心は自らに先立つもの (*Ahnherr*) を必要とはしない。彼には一切が与えられている。それは内的な自分に固有の世界とのみ関係している」¹⁸⁾良心がそれに先立つものを必要としないということは、人間は良心の起源としての人倫的な内容を自身の中に先立っては見出すことができないということ、人間が人倫的な内容を自らに付与するのだということを意味している。このような発言は、人倫的なものの起源を人間の外部の世界に移し換えようとする次のような他の発言に対立している。即ち「地球がどのように強くその数限りない現象によって人間を引き付けようと、やはり人間は探究しつつ、焦がれつつ、眼差しを高く天へと向ける。・・・何故なら、

人間はかの精神的な国の市民であって、それに対する信仰は拒否することも、放棄することも出来ないということを人間は自分自身の中で深く、明らかに感じ取っているからである」¹⁹⁾とか、或いは「全く解き難いことを我々は、一切を制限し、一切を自由にする存在としての神に委ねることにしよう」²⁰⁾といった発言がそれである。

*

最も内的な人間の本性について考察し、自己を観察するための器官がゲ-テには欠けている。「この際、私には、汝自身を知れ、という偉大な、極めて意義深いもののように思われる課題が以前から何やらうさん臭く思われたということ、更にそれがその到達不可能な要求によって、人間を混乱させ、外界にむけての活動から人間を内面的なまちがった観想へと導いていくために密かに盟約を結んだ坊主どもによって仕組まれた奸計のように思われたということ」を私は認めよう。人間は、自分の中にのみ認めることのできる世界を知り、世界の中にのみ自分自身の存在を認めるかぎりにおいてのみ、自分自身を知る。あらゆる新しい対象はじっくり観察されるならば、それにともなってまた新しい器官が我々の中に呼び覚まされる。²¹⁾そのことに関しては、ちょうど逆のことも真実である。人間は自分を知るかぎりにおいてのみ、世界を知る。その理由は、外界の事物の中で、反映、たとえば、象徴といった形で直観されるものが、その最も本来的な形で人間の内面の中で明らかになるということによる。いつもはただ、究めることができない、探究することのできない、神的なものに関して、人間が口にしていてのものと同様のものが、自己直観の中で、その真なる姿で人間の眼に明らかとなる。人間は自己直観の中に理念的なものをその直接的な姿で観ることができが故に、人間はこの理念的なものをあらゆる外的現象の中に、全自然の中に探し求め、認知する力、能力を獲得する。自己直観の瞬間を体験した者は、もはや現象の背後に「隠された」神を探し求めるようなことは考え

ようともしない。彼は神的なものを自然の中のさまざまなメタモルフォーゼ（変態）の中で把握する。ゲーテはシェリングに関連して次のように言っている。「私が未だ詩的な瞬間を望むべくもないような時に、私は彼の書物をより頻繁に目にすることであろう。しかも哲学は私にあっては詩（die Poesie）を破壊する。それはおそらく哲学が私を客観へと追いやることによる。しかもそれは私が純粋に思弁的な態度をとることができず、あらゆる命題（Satz）の解釈のために直ちに直観を求め、それ故におそらくはすぐさま自然の中へ逃れることによる。」²²最高の直観であるアイデア世界そのものの直観を彼は見出すことは出来なかった。それが詩（die Poesie）を破壊するというようなことはありえない。その理由は、それがただ自然の中においては知られざるもの、究め難いものがありうるというようなあらゆる推測から精神を解放するからである。その代わりにそれは精神をしてとらわれなく完全に事物の中に入りこんでいくことを可能にする。というのも、このような直観は、自然から精神の望みうる一切が取り出されうるという確信を人間に対して与えるからである。

最高の直観はしかしまたあらゆる偏った依存の感情から人間の精神を解放する。人間の精神はこのような直観をもつことによって人倫的な世界秩序の領域の中で自己が優越しているという感情をもつ。あらゆるものを生み出す推進力が彼自身の意志の中にも、彼の内面の中にも働いているということ、そして人倫的なものに関する最高の決断はその精神そのものの中にあるということにかかる精神は知っている。というのもこの最高の決断は人倫的なアイデアの世界からくるものであり、しかもその生産的な行為には人間の魂が関与していることによる。もし人間が個別的なものの中で限定されているという感情をもつとしたら、人間は数多くの事物にもまた依存していることになろう。しかし全体として人間は自らの人倫的な目標と自らの人倫的な方向性を自分自身に付与している。あらゆる

その他の事物の中の活動的なものが人間の中ではアイデアとして現象する。人間の中の活動的なものはアイデアであり、それは人間が自ら生み出すものである。すべての個々の人間の個性の中で、自然の全体の中に反映する過程が遂行される。即ち事実としてあるものの創造はアイデアに由来する。そして人間それ自身が創造者である。それは、人間の人格の根底に自分自身に内容を与えるアイデアが生きていることによる。ゲーテを越えて、我々は、自然は「創造の豊かさにおいて極めて偉大であり、それは無数の植物に倣って他の一切の植物を自己の内に含む一つの植物を作り出し、かつ無数の動物に倣ってそれら一切の動物を自己の内に含む一つの存在、即ち人間を作り出すほどに偉大である」という彼の命題をさらに拡大しなければならない。自然は、その創造においてアイデアから一切の被造物を自由に生み出す過程をあらゆる個々の人間において繰り返す程に偉大であるが、それは人倫的な行為が人格の理念的な根底に端を発していることによる。人間が自らの行為の客観的な動機として感じるものはすべて彼自身の本質的なものの書き換えであり、同時にその誤認である。人間はその人倫的な行為において自己自身を現実化する。『類い無きものと その所有せるもの（Der Einzige und sein Eigentum）』という論文において、マックス・シュティルナーは簡潔な命題でこの認識を吐露している。「私は私の力を所有する者であり、私が私を類い無きもの（Einzige）として知る時に、私はまさしくそれである。類い無きものとして、所有者自らがその生れ出てきた母胎としての創造的な無へと還帰していく。私を越えたより高次の存在は、それが神であれ、人間であれ、私の類い無きものとしての感情を弱めはするが、そのような高次の存在もまたかかる意識の輝きを前にして初めて色褪せたものになる。私が類い無きものとしての私に、私の所有するものを基づかせる場合には、それは自己自身を一切飲込んでいくそのはかなく過ぎ去る死すべき定め

の創造者にその根拠を置いている。そして私は自

ら私の所有するものを無に基づかしめたと言うことができる。』²³⁾しかし同時に、ちょうどファウストがメフィストフェレスに対して言ったように、人間はシュティルナー的な精神に向かって、「お前の無の中に俺は一切を見出したい」²⁴⁾と言うことができる。というのも、個別的な形成の働きにおいて、私の内面の中には、自然が一切を作り出す原動力として活動する力があるからである。人間が自らの中にこの活動する力を見ない限り、ちょうどファウストが地霊に対してそうであったように、人間はこのような力に相対立しているように思われる。この活動する力は絶えず人間に向かって「お前はお前のつかめる霊に似ているのであって、私にはない」²⁵⁾という言葉で呼びかける。最も深い内面的な生の直観がはじめてこのような霊を招来する。かかる霊は自らについて次のように言う。

生命の充溢と、嵐のような行為の中で、
俺は膨らみ、収縮し、
かしこに赴き、こなたに退く、
俺は生誕と墓、
永遠の海原
とりどりに機で織り上げ
灼熱する生である、
このように、時というざわめく織機で俺は
創造し、
神聖な生ける衣を作り出す。²⁶⁾

私は自著『自由の哲学』の中で、人間が行為するに際し、自分自身に根拠を置いているという認識がどのようにして最も内面的な体験の中から、己れ自身の本質の直観の中から生じてくるかを示そうと努めた。シュティルナーは1844年に、人間は己れを真実に理解するならば、己れ自身の中にのみ、自らの活動の根拠となるものを見ることができるという見解を擁護する発言をしている。彼の場合はしかしこの認識が最も内面的な体験の直観の中から出てきたものではなく、支配的な世界の強大な力のあらゆる桎

梏に対立する自由と独立不羈の感情から出てきている。シュティルナーはただ自由を要求するに留まっている。即ち、彼はこの領域において考えるかぎり最も極端に自己自身に根拠を置いた人間の本性を強調するのに傾いている。私はより広い基盤に立って、人間が自らの魂に立脚してものを見るときに何を見るかを示してみせることによって、自由な生 (das Leben in der Freiheit) を描き出そうとした。ゲ-テは自己認識に対して忌避する気持ちをもっていたために、彼は自由の直観にまで到達することがなかった。もしそうでなかったならば、自由な、自己自身に根拠を置く人格としての人間の認識が彼の世界観の頂点になったであろう。この認識に至る萌芽は、彼においてはいたるところに見られる。それは同時に彼の自然についての見解の萌芽でもある。

*

ゲ-テの本来の自然研究の内部では、彼は究めることのできない根拠、現象の中の隠された推進力についてはどこにも語ってはいない。現象をその継起する流れにおいて観察し、更に観察するにあたって感覚と精神に明らかとなる要素を介して現象を説明することで彼は満足する。1786年5月5日に彼はヤコービに宛て、このような意味のことを次のような言葉で語っている。「自分の手にすることができ」、しかもその本質について「適切な理念を形作ることを望みうる物の観察に私は自分の全生涯を捧げる」つもりであると。その際、彼は自分にどれだけのことができるのか、どういう能力が自分に付与されているのかといったことについては一切顧慮していない。個々の自然の事物において神的なものに近づいていくことができると信じる者は、事物の外に、事物と並んであるような神についての特別な表象をつくり上げることをもはや必要としない。ただゲ-テが自然の領域から立ち去る場合にのみ、事物の本質に対する彼の感情もまた存続しえない。そのような場合には、彼の人間についての自己認識の欠如が、彼に固有の思考法にも、彼の自然研究の方向にも

合致することのないような主張へと彼を導いていく。そのような主張に満足する傾向をもつ者は、ゲーテが、人間に似た神を信じ、しかも物理的な肉体の組織の条件に結びついた魂の生の形式が個別的に存在し続けると信じていた、と考えるかもしれない。ゲーテの自然研究とこのような信仰とは一致しない。もしゲーテがこのような自然研究において、このような信仰によって影響を受けることがあったとしたら、彼の自然研究は結果的にそれがとったような方向をとることはなかった筈である。彼の自然研究の意味するものの中にはそもそも、人間の魂が肉体の殻を破った後にも超感覚的な存在形式で生き続けるかのように人間の魂の本質を考えるような傾向が見出されることは確かである。その別の生の諸条件のために、物理的な肉体を通してもつものとは全く違った類いの意識形態がかかる存在形式には固有であるというのが、このような存在形式のもつ条件である。このようにしてゲーテの メタモルフォーゼン 変態論は魂における生の メタモルフォーゼン 変態の直観にもまたつながっていく。しかし彼の世界観のために、ゲーテが、物理的な肉体によって制約された精神的な生が メタモルフォーゼン 変態することなしに継続していくと考えるようにはならなかったということが知られる場合にのみ、人はゲーテの不死性の理念を正しく理解することができるであろう。ゲーテが、ここで示唆されたような意味において思想的な生を直観することを試みることをしなかったが故に、彼はその長い生の営みを通じてもまた、彼のメタモルフォーゼ（変態）の思想の継続であるような不死性の理念を特別なものとして仕立てあげるような誘惑には駆られることがなかった。この理念はしかし実際のところ、この認識領域との関連において彼の世界観から自ら導き出されてくるものであろう。彼の自然の研究を通して得られた世界観との関連を考えることなしに、彼がいろいろな同時代人の生についての見解を顧慮した折りに、或いは個人的な感情の表現以外のきっかけから彼が口に出して言ったことを、我々はゲーテの不死性の理念にとっての典型的なものとし

て挙げるようなことがあってはならない。

ゲーテの世界観の全形象の中で、彼の言っていることを評価するためには、彼の魂を規定した内容が、彼の年齢のそれぞれの段階において、その言っていることに特別なニュアンスを付与していることがまた考察の対象となる。彼の理念の表現形式の変化を彼は自らははっきりと意識していた。ファウストの問題の解決は、「善い人間はたとえ暗い衝動の中にある時も、正しい道はきっと忘れぬものだ」という言葉から明らかにされる、という見解をフォルスターが口にした時に、ゲーテは答えて言っている。「それは確かに一つの説明ではあるだろう。ファウストは老人として終る。老齢において我々はすべからく神秘家になる。」²⁷⁾（フォルスターの遺稿より、216頁）更に散文による箴言において彼は次のように言っている。「人間の年齢のそれぞれの段階に、ある種の哲学が対応する。子供は現実主義者として現われる。けだし、子供は梨にせよ、リンゴにせよ、その現存在を自分のものとして確信するのだから。青年は、内なる情熱に駆られて、自分自身に注意を払い、自分の可能性を予感し、理想主義者へと変貌する。それに対して懐疑家になるためには、我々は原因に事欠くことがない。目的のために選んだ手段が果たして適切であるかどうかを人は疑うであろう。後に間違った選択をして悔やむことがないように、行動する前に、行動のさなかに、人は分別を働かせるための原因に事欠くことがない。それにも拘らず、老人は常に自らが神秘主義的な傾向をもつことを認めるようになっていく。彼は極めて多くの事柄が偶然に依拠しているように見えることを認める。非理性的な事柄がうまくいき、理性的な事柄が失敗に帰する。幸と不幸は予期せぬ形で同じ結果に帰する。現にそうであり、現にそうであったのである。高齢にある者は現にあるものに、またかつてあったもの、そしてこれからもあるであろう事柄に満足を見出す。」（キュルシュナー版、第36、2巻、454頁）

私はこれまでゲーテの世界観を見てきたが、

この世界観の中から、彼の自然の生への理解が生れてきたのであり、その世界観が彼においては、人間の中の顎間骨の発見から色彩論の完成にまで彼を駆り立てていく推進力となったのである。そしてこの世界観がゲ-テの全人格に完全に対応していることは、このような彼の思想が、彼の青春時代の、或いは老年の時代の気分によつてどのように彩られているかを顧慮しなければならない時に問題となる彼の一聯の言葉がゲ-テの全人格に完全に対応している以上にはっきり言えるということを私はこれまでに示してきたと信じる。彼の自然研究において、たとえそれがはっきりとした、理念に適った自己認識によって導かれたものではないにしても、正当な感情に駆られて、自由な、人間の本性の外界との真実な関係の中から導き出されてきた方法をゲ-テは観察してきたのだと私は思う。ゲ-テははっきりと、彼の思考法の中に何か未完成なものがあると意識していた。彼は言っている。「私は高貴な、偉大な目的を意識してはいた。しかし私が活動するための諸条件を私は決してはっきり把握してはいなかった。私に欠けているものに私は恐らく気づいていたし、私に有り余るものについてもまた同様に気づいていた。それ故に私は外に向けて、或いは内に向けて自己を形成していくことを止めなかったのである。しかし事態は変わらぬままであった。私は真剣に、力一杯、誠実にそれぞれの目的を追求してきた。その際、どうにもならないような諸条件を完全に克服することにうまくいくこともあったが、しかし私がそれに専念し、それを扱うすべを学びえなかったが故に、うまくゆかないこともまた度々あった。そのようにして私は行為し、享受し、苦しみ、また抵抗しつつ、あるいは愛しつつ、満足し、また時に憎み、時には他人の不興を蒙りながら、私の人生は過ぎ去っていった。この故に、どうせ私の人生が同じ運命とならざるをえないとするならば、私の人生に己れを反映させてしかるべきである。」²⁸⁾

テキストは RUDOLF STEINER, GOETHE'S WELTANSCHAUUNG (BASEL, 1963) の中の GOETHE'S STELLUNG INNERHALB DER ABENDLÄNDISCHEN GEDANKENENTWICKLUNG による。

原 注

- 1) 『散文による箴言』(キュルシュナー 監修『ドイツ国民文学全集』の『ゲ-テ自然科学論集』第5巻), 495頁。
- 2) 『年代記』1790年(ゾフィー版, ゲ-テ全集, 第1部, 第35巻), 15/16頁。
- 3) 『色彩論のための補遺』(『ゲ-テ自然科学論集』, 第5巻), 294頁。
- 4) 同書(293頁及び294頁)。
- 5) 『詩と真実』(ゾフィー版, ゲ-テ全集, 第1部, 第28巻), 70頁。
- 6) エミール・デュ・ボア・レイモン『自然認識の限界について』(ドイツの自然研究者と医者による第45回集会でなされた第2回公会議での講演, ライプツィヒ, 1872年)。
- 7) 『散文による箴言』(『ゲ-テ自然科学論集』, 第5巻), 495頁。
- 8) 同上。
- 9) 『エッカーマンとの対話』1831年2月20日。
- 10) 『ゲ-テとの対話 第2部』(アルテミス版, 第23巻), 741頁。
- 11) 『植物生理学の予備的研究』(『ゲ-テ自然科学論集』, 第5巻), 563頁。
- 12) 『穏和なクセーニエ』(ゾフィー版, ゲ-テ全集, 第1部, 第5, 1巻), 92頁。
- 13) 『エッカーマンとの対話』1829年9月1日。
- 14) 『散文による箴言』(『ゲ-テ自然科学論集』, 第5巻), 449頁。
- 15) 『捕らえられた、挫折しながらも、常に泰然として活発であった若き獵師の戦友, ゲ-テによるはしがき, 1826年』(ゾフィー版, ゲ-テ全集, 第1部, 第42, 1巻) 125/126頁。そこには字句通りには次のように書かれている。「あるより高次の影響力が、毅然とした、活動的な、分別のある、几帳面な、きちんとした、人間的な、敬虔なる者に有利に作用する。そしてここに、道徳的な世界秩序が、善良な、実直ではあるが、悩める者に直接助けとなるところで最高に素晴らしい姿をとって現われる。」
- 16) 『散文による箴言』(『ゲ-テ自然科学論集』, 第5巻), 460頁。
- 17) 同上。

- 18) 同書, 412頁。
- 19) 『ミュラー宰相の日記, 対話, 第2部』(アルテミス版, 第23巻), 32頁, 1818年4月29日の対話。
- 20) 出典不詳。
- 21) 『適切な一語による著しい促進』(『ゲーテ自然科学論集』, 第2巻), 32頁。
- 22) 1802年2月19日付けのシラー宛の手紙。
- 23) マックス・シュティルナー『類いなきものとその所有せるもの』(ライプツヒ, 1911年), 354頁。
シュティルナーのテキストでは, 私という人称の頭
- 字が常に大文字で記されている (Ich, Mir, Mich)
- 24) 『ファウスト』第2部, 第1幕, 6256行。
- 25) 同書, 第1部, 512行。
- 26) 同書, 第1部, 501行及び次行以下。
- 27) 『ミュラー宰相の日記, 対話, 第2部』(アルテミス版, 第23巻) 543頁。
- 28) 『伝記風の詳細な記述, 我が生涯より, 断片, 後期』(ゾフィー版, ゲーテ全集, 第1部, 第36巻), 231頁。

(1992年7月10日受理)